

姫路城城下町跡

－姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書－



平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

1. 調査に至る経緯と調査の位置

兵庫県姫路市駅前町241番他において、姫路駅前商店街のアーケード改修が計画された。一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地の姫路城城下町跡である（図7）。『姫路城跡（城郭図）』（図8、以下「絵図」という。）によると、当該地は城下町南端に位置し、武家屋敷、下屋敷、街路、土塁及び外堀に該当する。

姫路駅前商店街は、その北隣にある姫路みゆき通り商店街とともに「みゆき通り」の名称で親しまれているが、この名称の歴史は古く明治までさかのぼる。城下町から軍都へと大きく変貌した姫路では、明治36年、陸軍特別大演習が挙行され、明治天皇による城北練兵場（現姫路競馬場周辺）観兵式行幸のため、姫路駅から城南練兵場（現大手前公園周辺）に向かう直線道路が新設された。これが、「御幸通り」の由来となったという（高橋1974）。その後すぐに旅館や商店などが進出し、少なくとも大正6年頃には日除け天幕開閉式のアーケードが設置され（高橋1970）、現在の姿が形成され始めていたようである。

今回のアーケード改修工事では、既存の基礎と重複しない新設の基礎、電線等の埋設管等を一時迂回するための仮設柱などの工事箇所（図1）を対象に、記録保存のための本発掘調査を行った。調査は、店舗の閉店後に行われた工事等にあわせて概ね夜間に実施した。

2. 調査の結果

調査区1（図2） 現地表下約1.7mで、断面L字を呈する切石の構造物を検出した。平坦面を上に向けた石敷きと、その南端の調査区南壁からほぼ垂直に立ち上がる布積みの石組みで構成される。石敷きから石組みの立ち上がりの間約60cmには、水流に起因すると思われる砂層が堆積していることから、水路と考えられる。遺物は出土しなかったが、石材の形態や積み方から近代の遺構である可能性が高い。絵図では土塁の想定部に該当している。

調査区2（図3） 現地表下約75cmで間知石の後端部を北に向けた2石と多数の円礫を検出した。調査区が狭小で精査は困難であったが、西壁において黄褐色砂礫の地山とその直上の3層からなる整地層と思われる土層、整地層を切り込むラインを確認した。このラインは、石材の検出状況等から、外堀の北側石垣の掘方と考えられ、後に石垣の築石が間知石に入れ替えられたものであろう。絵図上の想定位置からは10mほど南へずれることになる。遺物は出土しなかった。

ここで再び調査区1に戻り、絵図上の土塁の位置が調査区2と同様、南へ10m程ずれているとすると、L字状構造物が土塁北側の法尻付近に該当することがわかる。近代に入って、土塁を解体した後に石組み水路を新設した可能性も否めないものの、外堀の土塁北側にあった石組み溝を改修したと考える方がより妥当性が高いといえよう。このように想定すると、同地点から東西へ延びる商店街の小路がその名残をとどめているようにもみえる。

調査区3・4（図4・5） 調査区3では南に面を持つ切石の構造物を確認した。既設管路の掘方による削平を受けており、石材は3石が残存していた。調査区4の西壁では、面を上に向けた間知石4石とその両側に面を垂直にした間知石を2石検出した。これらの石材は外堀の埋土と考えられる粘土層の上に構築されていたことから、明治・大正年間に外堀の一部を埋戻した際（橋本1982）に構築されたものと考えられる。

調査区5（図6） 外堀以南に位置する。旧耕作土、にぶい黄褐色シルト及び暗緑灰色砂礫を確認した。この旧耕作土は駅前町遺跡（図7）で既に確認されている近世の耕作土（秋枝・中川2000他）と一連のものと想定できる。後二者は地山で、良好な残存状況を示していた。

今回の調査で検出した石の構造物等については、調査区2の掘方ラインを除き、近代以降のものである可能性が高く、外堀には直接関連しないとも考えられる。しかし、近代以降の外堀や土塁の変遷をたどる近代遺跡として、解体調査等を行わず現状保存とした。また、個別に図等で提示しなかったものの、土層の堆積状況から近世のものと思われる遺構埋土等を確認した調査地点も多い。

3. まとめ

絵図で想定されていた外堀及び土塁の位置は、調査区1・2で確認した構造物などから、10m程度南にずれ、城下町の範囲がさらに南まで広がっていたと考えられる。中心市街地に位置する姫路城城下町跡では、これまでに行われてきた発掘調査等で、高層の建物を除けば遺構が良好に残っていることがわかってきてている。今回の調査では、狭小な調査区のために、精査は困難を極めたが、商店街の地下でも遺構が良好に保存されていることが改めて確認できた。

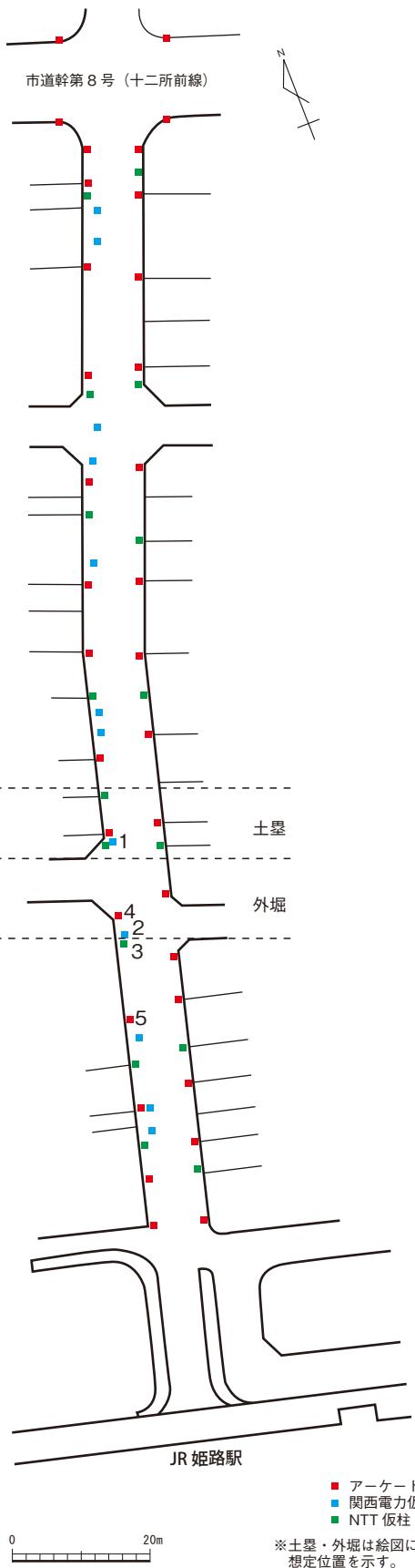
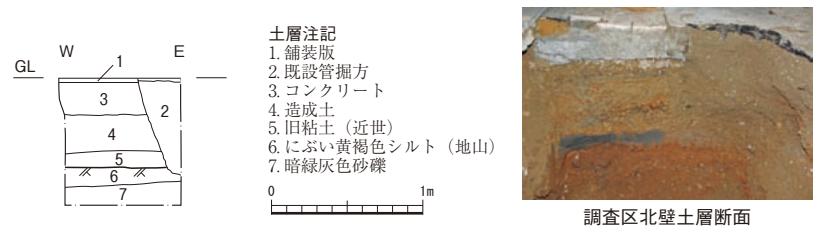
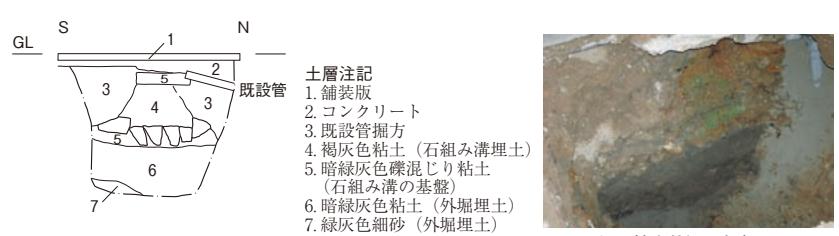
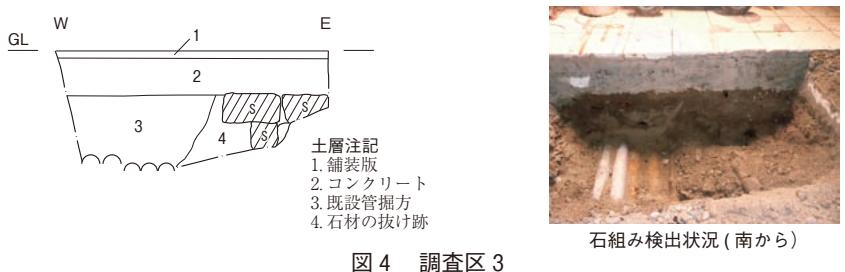
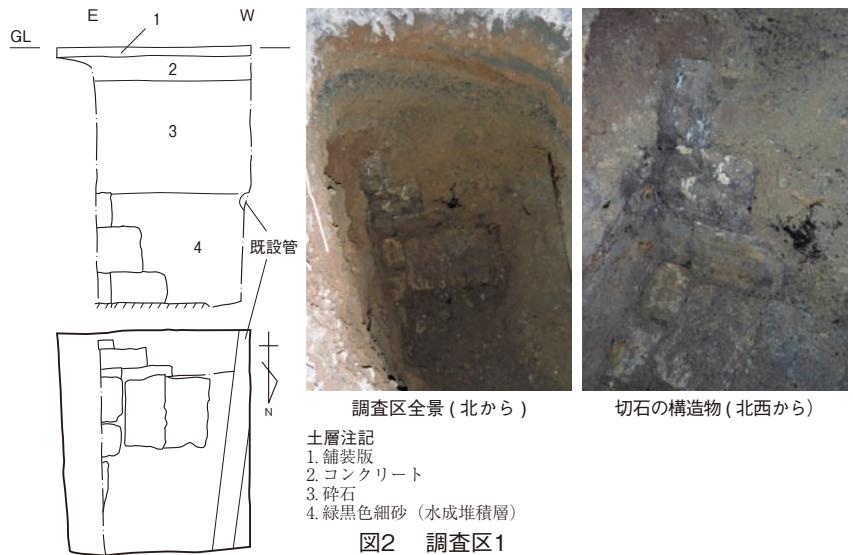
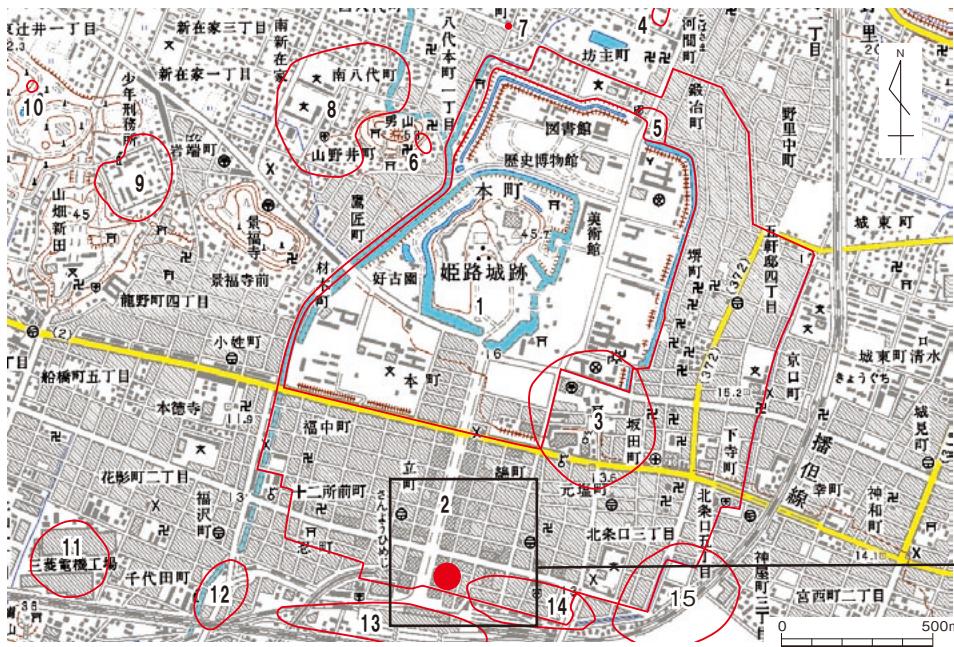


図1 調査区配置図





1. 特別史跡姫路城跡
2. 姫路城城下町跡
3. 本町遺跡
4. 富士才遺跡
5. 野里門下層遺跡
6. 東山焼窯跡
7. 御茶屋町遺跡
8. 八代深田遺跡
9. 岩端町遺跡
10. 名古山遺跡
11. 千代田遺跡
12. 南畠町遺跡
13. 豆腐町遺跡
14. 駅前町遺跡
15. 神屋町遺跡

図7 周辺の遺跡



※「姫路侍屋敷図」(文化13年(1816)以前)と市街地図を合成した『姫路城跡(城郭図)』に加筆

図8 調査地の位置

報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと								
書名	姫路城城下町跡								
副書名	姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第23集								
編著者名	大谷輝彦 福井優								
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター								
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950								
発行年月日	平成26年(2014年)3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
ひめじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 駅前町241~337、 232~314番地先	28201	020169	34° 49' 43"	134° 41' 29"	2013.7.11 ~ 2014.2.24	-	アーケード 改修	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号		
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代 (近代を含む)	石垣、外堀、石組み溝	なし			20130150 20130182 20130390		

一例言一

1. 本書は兵庫県姫路市駅前町241~337、232~314番地に所在する姫路城城下町跡(県遺跡番号020169)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、姫路駅前商店街振興組合(理事長 松岡淳朗)からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査(遺跡調査番号20130150、20130182、20130390)は、姫路市埋蔵文化財センター 大谷輝彦、福井優が担当した。
4. 整理作業は姫路市埋蔵文化財センターで行った。
5. 図7は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「姫路北部」「姫路南部」を使用した。
6. 土層の色調は「新版標準土色帳」(1995年版)に準拠した。
7. 本書の執筆・編集は、大谷・福井が行った。
8. 本報告に関する写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 表紙の写真は、今回の調査対象地から南の姫路駅に向かって撮影したものである(昭和33年頃)。写真は瀬川カメラ店所蔵。使用にあたっては、瀬川カメラ店にご高配を賜った。
10. 本書を作成するにあたり、以下の文献を引用・参考にした。

橋本政次1973『姫路城跡(下巻)』名著出版 高橋秀吉1974『大正の姫路』駅路の会事務所/姫路百年編集委員会編1990『姫路百年』姫路市/加藤得二1968『2姫路城周辺の変遷と整備』姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第十四巻 別編姫路城 姫路市/秋枝芳・中川猛2000『7.(仮称)姫路駅周辺4地点遺跡(第1次)』小柴治子編『TSUBOHORI』平成10年度(1998)姫路市埋蔵文化財調査略報 姫路市教育委員会/糸田恒雄(監修)2005『保存版 姫路市今昔写真帖』株式会社郷土出版社/糸田恒雄(監修)2009『保存版 ふるさと姫路』株式会社郷土出版

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第23集

姫路城城下町跡 一姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発行日 平成26年(2014年)3月31日

印刷・製本 丸山印刷株式会社

〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号